

Dream of Mountains

夢を見た。

わたしは両親と共に山岳地方へ旅行に行っていた。

わたし達は、ただ散歩程度にどこかの国定公園かなにかの遊歩道を歩いていた。空はよく晴れわたっていて、気持ちのいい、春の終わり頃だった。

少し登ったところに土産物屋を併設する展望レストランがあつて、そこにレンタルサイクルがあると言う案内標識を見た。元々、この旅には大した目的はなかったもので、ちよつとした時間潰しにそこへ向かうことにした。

久しぶりの高原散策であつた。

うちの家族は、父と母とわたしだけという、いわゆる核家族だ。私が子供の頃には、毎年、夏になると3人で北アルプス登山を楽しんだ。

高地の清流、槍、穂高連峰の嶺々は、今でも眼前によみがえる。

かつての両親は、週末ごとに、登山、スキー、キャンプへと、嫌がるわたしを無理矢理に連れて行つた。そんな活動的だった両親も現在では体力も落ち、趣味のスポーツといえばゴルフぐらいのものだ。一方、わたしは子供の頃にあんなに嫌っていた山に、年を負うごとにどんどん惹かれていき、両親が嫌がる山の危険な面に憧れさえ抱くようになっていた。そして、その深淵に一步一歩入り込もうとしていた。そんな想いからか、夢の中のわたし達の眼前には、険しい岩壁を持った山の頂が現れたのであつた。

そこは、峠の展望レストランに併設されている土産物屋だった。私達は、そのダイナミックな景色を土産物屋の壁一面の巨大な額縁のようなガラス窓から見たのだつた。高山の中に入った時の特有の感覚に酔っていた。すり鉢状に切り取られた景色の中では、自分が重力に対して、きちんと垂直に立っているのが怪しくなる。

父は、土産物屋のレジでレンタルサイクルの説明を聞いている。

そして、大きく跳躍した。彼は飛んだ。崖から。

「自殺した」と、呟いたわたしに、いつの間にかに横にいた父が低く「ああ」と言葉にならない声で答えた。「自殺した」と口には出してみたが、未だ状況がうまく飲み込めていない。そのうちに何故か同じ情景が繰り返される。今度は女が暴れている。

彼女もまた、止める人の手を振りほどいて崖から飛んだ。先程の男よりは跳躍力は弱い、確実に、そして躊躇うことなく視界の向こう側へ飛んでいった。

ともかく、結果は、はじめから決まっていた。

目の前には爽やかな晴天と壮大な風景。

だが、耳より後ろには、真っ黒な闇に落ち続ける感覚が残され、もはや平らな場所に着地はできない。

犬のようなうめき声が自分の口から洩れている。

わたしは、とにかく体を動かしたくとうずうずしていた。父の姿を横目で見ながら、久々に見た荘嚴な風景に感激している様子の母が気になっていた。ついさっきまでサイクリングに乗り気だった母がやっぱり疲れるからと言いつい出さず、とか、何故か旅先でいつも我が儘になる母のご機嫌をこの辺で取っておくべきかと思案していた。早くも家族旅行の閉塞感にうんざりし始めていたわたしは、自転車でも何でも良いから何か正当な理由を付けて、両親からほんの少しの間だけでも離れたかった。

わたしと母は、岩場に行く登山者のグループを眺めていた。グループのうち一人は、かなり危険な場所に取り付いていたが、彼はわたし達のいる展望レストランから数百メートルも先で岩と格闘していたので、鮮やかな色の甲虫が岩肌で蠢いているだけの様にも見えた。彼は、必死だった。だが、虫のようにしつこくへばりついていることはできなかった。

突然、彼は足を滑らせ、そして両手が掴んでいた岩から離れた。彼は落ちた。何百メートルも下へ。重い物が高いところから落ちる、壁に立て掛けられていた鋼鉄の板が倒れ、床に叩き付けられるような深く、重い音。頭の中で余韻がずうっと続く。

確かにそれはショッキングな光景であつたが、わたし達家族は毎シーズン登山に行っていて、人が落ちるところを見るのは初めてではないような気がした。もしかしたら初めてだったかもしれないけれども、北アルプスのような場所では、常にそれはあり得る事故だった。やがて、彼が落下した地点（彼は即死だっただろう）の辺りに同じグループの男女が降りてきた。そこには、他の何人かの登山者が彼の即死を疑わないのにも関わらず救援のために集まってきていた。その様子を遠目に見ていた私と母には、滑落した彼の体は見えなかったけれど、それがどんな状態かは想像できた。暫くして、その場でもめ事が起こっていることに気付いた。一人の男が取り乱し、岩場を走り回っていた。その場にいた数人は、彼を取り押さえようと懸命だった。その暴れている男は、滑落した男と同じ登山パーティーであつた。

彼は人々の手を振り払い、走っていった。